新年を迎えて

赤司 泰義
YASUNORI AKASHI
（（一社）建築設備技術者協会 会長，東京大学大学院 教授）

新年あけましておめでとうございます。昨年は想像もしなかったコロナ禍によって我々の生活が極めて大きく影響を受けた一年でした。本稿の執筆時点でも国内の新規感染者数が再び増加しており，欧州のいくつかの都市では部分的な再ロックダウンが行われています。社会は全く不透明な状況にありますが，コロナ禍が少しでも収束の方向に移行し，本協会会員の皆様が健やかにご活躍される年になることを切に願っております。

ただ，ご承知の通り，このコロナ禍はすぐに収束するとは考えられていません。少なくとも数年，場合によっては十年以上かかるかもしれないと言われており，with/after コロナは長期にわたる可能性があることを覚悟する必要があります。昨年は社会のリモート化が一気に広まりました。「リモート」の様々な効能を感じつつ，同時に「リアル」の価値も改めて認識したという方も多いかと思います。しばしば言われていることですが，感染症のリスクを極力抑えて，居住の満足度を最大化していくには，リモートとリアルのどちらか一方を選ぶのではなく，それらのベストミックスに基づいた「ニューノーマル」を探る必要があります。このことは我々の生活や働き方が従来とは少々異なるものになっていくことを意味しています。

さらに，昨年10月には日本の気候変動への取り組みとして，2050年までに脱炭素社会（カーボンニュートラル）を実現することが宣言され，いよいよ現実的な施策のもとで推進されることになりました。また，コロナ禍にも対応する健康・快適環境，BCP の実現はより一層求められることになります。加えて，情報技術が我々の生活に浸透してフィジカルとバーチャルが徐々に融合し，我々の生活を良い方向に支えるデジタルトランスフォーメーション（DX）への期待も高まっています。そして，こういった社会課題に建築設備（Building Services）が直接的に関与していることに大きな異論はないと思います。人新世時代の岐路ともいうべき今，建築設備技術者は何を考え，何を目指すべきでしょうか。

その答えを見つけることは容易ではありませんが，少なくとも言えることは，我々の習慣的な仕事の仕方や考え方に頼りすぎることなく，技術者としての理念に沿いながら，知恵を活かして既存の殻を破り，チャレンジしていくことだろうと思います。そのためには，継続的な自己研鑽，多様で自由な議論，そして周囲を巻き込んだ協創が必要です。

一昨年に本協会は創立30周年を迎え，様々な観点から協会自身が新しいフェーズに入っていることを感じます。昨年は本協会でも，会議や催事をリモートまたはリアルで行う際の実施方法や感染症防止のガイドラインを整え，協会運営を大きく停滞させることなく柔軟に対応してきましたが，これまでの協会活動で蓄積してきた様々なコンテンツやイベント実績の経験を活かしながら，今後の持続的な協会運営のあり方を考えるのも重要な課題かと思います。皆様一人ひとりの技術者としての成長を下支えするためには，どのような学びの機会，交流の機会を提供すればよいか，どのような情報を発信すればよいか，今一度，根本的なところに立ち戻って，本協会会員の皆様とともに考えていきたいと思います。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。